

第二回

琉球・中国交渉史に  
関するシンポジウム

論文集



中国第一歴史档案馆前で

歓迎会で（1993年10月9日）





戈 斌氏



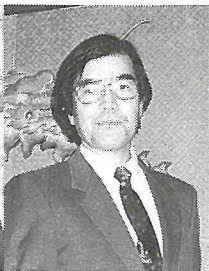
西里 喜行氏



秦 国経氏



俞 玉儲氏



上里 賢一氏



朱 淑媛氏



徐 藝圃氏

## 第二回シンポジウム開催に際して

沖縄県教育委員会教育長 嘉陽 正幸

本日ここに第二回琉球・中国交渉史に関するシンポジウムを北京で開催するにあたり一言ごあいさつ申し上げます。

さて、御承知のとおり日・中両国は、これまで隣国として長い友好の歴史をもっております。特にわが沖縄県の場合は、琉球国中山王察度が洪武帝の招諭を受け入れて中国に進貢してから廃藩置県に至るまで、およそ五百年余りにわたる国家間の正式の交流の歴史があります。その間、琉球は中国との進貢・冊封関係を通じて中国の高度に発達した文化を摂取受容し、独特の王国として発展してきました。

本シンポジウムは、一九九一（平成三）年三月十八日に沖縄県那覇市において正式調印された「清代の檔案マイクロファイルの相互交換に関する中国第一歴史檔案館と日本沖縄県教育委員会との覚書」に基づいて開催されるもので、昨年那覇大会の成果を継承しておりますが、そのねらいは、日・中の研究者が特にテーマを明清時代における中国と沖縄の歴史史料に関する研究に限定し、日・中共同で、沖縄と中国の歴史的關係について理解を深めることにあります。

本シンポジウムには、日本側から十六名が参加して二名の先生方が発表されます。又、中国側からは徐藝圃中

国第一歴史档案館館長をはじめ五名の先生方が発表なさいます。発表をお引き受け下さいました日・中両国の先生方に対し、厚くお礼を申し上げます。さらに本シンポジウムの諸準備等を担当された事務当局に対しても厚くお礼を申し上げます。

ところで、琉球・中国交渉史に関しては、これまで多くの日・中の研究者の御努力によってその全容がかなり明らかになっております。しかしながら細部につきましては、必ずしも十分とはいえない面があります。本日、日・中の研究者が一堂に会し、それぞれの専門のお立場から琉球・中国交渉史についての共通理解を深められることは、日・中の学術交流を促進する上で誠に画期的なことであり、又、極めて有意義なことだと考えております。

最後になりますが、どうかこの機会にじっくり討論を重ねられ、本シンポジウムが多大の成果を収められますよう御祈念申し上げます。あいさつといたします。

一九九三年十月九日